

〔翻訳〕

ヘンデルのオラトリオと18世紀思想（その8）

ルース・スミス 著
赤井 勝哉 訳*

第3章 音楽、道徳、宗教

芸術が人間の高次元の理知的本質に訴えかけ、知性を惹きつけるものであってほしいと望む人々にとって、音楽には常に問題がつきまとっていた。すなわち、分かりやすい歌詞と密接に結びついていない場合、音楽は理解を助長するのではなく逆にその妨げとなる、という問題である。18世紀のイングランドにおいて音楽に関して最も頻繁になされた発言は、音楽は感情を支配する力を有するがゆえに危険である、というものであった。器楽や、あるいは（引き延ばされたメリスマのように）歌詞と緩やかな結びつきしか持たないような音楽は、特に有害であると考えられている。それは、このような音楽が客観的思考を阻害するような感情を掻き立てるからであり、また多くの場合、器楽がもたらす印象は曖昧模糊としたものであるがゆえに、その音楽がどのような感情を喚起しようとしているかということについてさえ、聴衆は戸惑ってしまうからという理由による。このような障碍によって引き起こされる苦悩は、音楽に関する文献、特にイタリア・オペラについての論評の中に見出される。

音楽は、意味によって道を指し示されることがない場合、
魅了はしてもそれは騙すため、和ませはしてもそれは蝕むため。
意味を缺くのであれば、魂をそそのかすこの芸術は、
じわじわと効き目をあらわす毒薬を、病みゆく心⁽¹⁾に投げつけます。

* Peter Katsuya AKAI 本学文学部教授（言語文化学科）

他の者たちにとってもそうであったように、ヒルにとっても、ある種の楽器は、単独で用いられた場合、有益な感情を喚起するのに好都合なものであった（例えば、本書78頁に引いた詩文にあるように、太鼓とトランペットは勇気を奮い立たせるものであった）。しかし合奏曲は、「人間らしさを損ねる」感情で我々を満たして圧倒するという自らの能力のゆえに、極めて危なげなものとなる。職業音楽家や、人間の本質を楽観的に捉える傾向がある音楽愛好家たちのなかには、無条件で音楽を称揚するような者もいたが、そのような人間は少数派であった。しかもその少数派でさえも、社会を啓蒙する影響力を持ったものとして音楽を正当化してゆく必要性を感じていたのである。イタリア・オペラの甘美な管弦楽法は、芸術を道徳的に改良しようとする者たちに、多くの心地の悪い身震いを起こさせている。自分が極めて音楽の感化を受けやすい人間であることを公言していたデニス（「私ほどハーモニーの持つ力を確信し、骨の髄まで音楽の魔法に取り憑かれている人間は存在しない」）は、改良推進派側の主張を展開している——音楽は「理性に服従して」いるときには「喜びを与えるものであると同時に有益なもの」となりうるが、「我々の昨今のオペラがそうであるように、おこがましくも独り立ちして自由勝手な道を進むと、我々の知力を鍛錬することなど全くできず、単なる官能的な快樂へと成り下がってしまう……柔らかで甘美な音楽は、知性を甘やかし……精神を去勢して溶かしてしまうことによって、剛毅の精神をまさにその土台から揺るがすことになる⁽⁴⁾」。

このような反応を、「純粹に美的な」経験など存在しないという認識であるとして尊重することはできる。あるいは、「18世紀の大多数の音楽批評を支えていた、歌詞は音符に対して道徳的に優越するという俗信⁽⁵⁾」として一笑に付すこともできよう。いずれにしても、オラトリオの成り立ちの背景を探ろうとする際、上記のような反応が音楽に対する基本的な態度であったという事実は斟酌されねばならない。この態度は、あまねく認められた主張に基づいている。すなわち、感情に対する音楽の影響力という問題は、それが人間の行動を左右しうるがゆえに倫理的な問題である⁽⁶⁾、という主張である。ヘンデル自身、この問題を作品全体の主題とした、一夜の出し物を作っている。《アレグザンダーの饗宴》である。ティモテウスによる感情を揺さぶる演奏によって、「主人公^{ヒーロー}」であるアレグザンダーは操り人形になり下がり、酔った挙句の破壊行為（ペルセポリスの焼き討ち）へ

と突き進むのである。ドライデンの原詩でも、ハミルトンによる台本（原詩に本質的な変更は加えていない）においても、明らかにティモテウスは、18世紀の作家たちが作曲家や演奏者たちに求めた善に対する熱望を欠いている。ティモテウスと対比されているのが、敬虔なる聖セシリアである。セシリアの音楽は有益そのものであって、天空の注目さえ集めるほどである。1738年10月14日の『コモン・センス』においてこの作品を論じた記事の著者は、ティモテウスが^リ堅琴の音域を広げてその危険なほどの表現力を拡張したが故にラケダイモン人たちが彼に対して発した禁令のことを語るに際して、ふざけた調子を保ちながらも可能な限り真剣に、この禁令を首肯している。芸術は国に影響を及ぼしうるのだから国家にはこれを抑制する権限がある、というわけである。伝統を打ち壊したティモテウスという名のミレトス人と、アレグザンダーの饗宴における演奏者——この2人の古代の堅琴弾きを、18世紀の人々はしばしば融合してしまう傾向があったのだが、ドライデンの詩の中では、そしてあるいはヘンデルの曲付けにおいても、危険な過激派であるように仄めかされている。18世紀のイングランド批評において、彼は有害な芸術を強力に象徴するものであった（この話題に触れた論評は『コモン・センス』のこの記事以前にもいくつもあり、そのうちの1つは『ブレイン・ディーラー』紙に載ったアーロン・ヒルによるものである）。ヘンデルは《アレグザンダーの饗宴》において、例によって人口に膾炙した事物を利用し、同時代人の関心を惹こうとしているのである。⁽⁷⁾

説教壇からの眺め

音楽が持つ破壊的な力に対する恐怖の念は、音楽が用いられる主要領域の1つにおいて特に強かった。教会である。20世紀の研究者は以下の2つの点に留意する必要がある。すなわち、18世紀のイングランドにおいては、教会の見解は現在よりもはるかに大きな影響力を持っていたという点。そして、説教、聖書注釈、および宗教を論じた書物が国民の読み物の主要な部分——ことによると最大の部分——を占めていたという点である。⁽⁸⁾ 教会人たちの論評は同時代の音楽批評の大半を占めており、専門の音楽家たちが書いたものよりも遥かに広範囲の読者の目に触れていたのであって、しかも彼らの論評は教会音楽だけに限られていたわけ

ではなく、あらゆる類の音楽の作用について評価を下している。⁽⁹⁾

音楽に論及した説教やその他の文章において教会人たちは世俗音楽について深い懸念を表明しているのであるが、その態度は教会音楽を好意的に論じている場合でさえ——器楽を云々する際には特に——神経過敏気味である。この観念論争の場で戦わされていたのは、ただ音楽と道徳の問題だけではなかった。国教会の支持者たちはピューリタンに対する攻撃を行っていたのである。教会音楽、特に、より複雑な大聖堂の音楽に対するピューリタンの攻撃は王政復古以後も長く続いたが、それがいかに激しいものであったかは、1740年代に入ってもなおイングランド教会側が徹底した反駁を繰り広げていることから、明白に窺い知ることができる。⁽¹⁰⁾擁護側の論拠は、「音楽は、正しく処方されるのであれば、どれだけ傾倒しても傾倒しすぎることはないほど素晴らしいものである」、というのも音楽は「感情を落ち着かせ、力強い喜びを与え、高潔な思いを掻き立てる」からであり、「宗教的な調べ」^{ハーモニー}は「我々の内なる最良の血を湧き立たせ、情感のなかの最上の部分を捉えて、神聖な美によって我々を夢中にさせる」⁽¹¹⁾からである、というものであった。1741年に聖職者たちに向けて発した諭示の中で、のちの大主教セッカーは以下のように合唱によって創造主を讃美することを奨励しているが、その言い回しは同じ主題について同時代人がヘンデルのオラトリオの合唱を語る際の言葉遣いと符合していた。

誠に、生まれつき才能を有する全ての人々は、詩篇および霊的な歌によって絶えず彼らの創造主の栄光を讃えられるようにならねばならない。……より良きこと〔訳注：歌による讃美〕が少数の者によってなされても……^{ハーモニー}大人数による合唱の調べに匹敵することはほとんどない。合唱においては、いかなる些細な耳障りな音も消え失せてしまうからである。しかも、聖書の言葉を使って言わせてもらうなら、大水の轟音や雷鳴と同様、大群衆が彼らの救いの神に向かって喜ばしき声を上げ、理解力をもって神の誉め歌をうたうのを聞くと、筆舌に尽くせぬほど心が高揚するものである。⁽¹²⁾

しかし、聖楽曲は神を讃美するものであり世俗曲は人を楽しませるものである、

という伝統的な区別は、近代的な「快活で軽快な」作曲様式が礼拝音楽の領域へと侵入してきて「教会様式とでも呼ぶのが相応しいであろうものが持つ荘厳さと厳肅さ⁽¹³⁾」に取って代わりつつあることから生じた不安感によって、さらに強固なものとなっている。大聖堂様式を擁護する際、音楽が及ぼす相反する影響について見て見ぬふりをするような説教者もいたが、多くは以下のことを認めている。

音楽とは両刃の剣である。反逆的な激情を鎮めることができるのと同時に、美德に宗教に対して致命的な傷を負わせることもできる。それ故に必ず、常にこの剣は気の確かな者の手中になければならない。……敬虔なる愛情を掻き立てるはずのものが、あらゆる邪悪な欲望を煽って炎のように燃え立たせるかもしれないし、悪徳の燃料とも誘因ともなりかねない⁽¹⁴⁾のである。

礼拝の音楽がこのように考えられたほどであるから、世俗的な娯楽と結びついた音楽に関しては、なおさら有害なもの、大抵は致命的なものと考えられた。音楽をめぐるあらゆる説教の中心的な関心事は、ウィリアム・ディングリーの次の言葉によって最も簡潔かつ示唆的に表現されている——「音楽は、それが有益であるのとほとんど同程度に危険である。音楽には火薬のような力があるので、邪悪な火によって破壊的な力を与えられることがないように、火薬の如く慎重に扱わなければならない⁽¹⁵⁾」。ディングリーはこの火薬の比喩をジェレミー・コリアーの『イングランドの舞台の不道德と冒瀆をめぐる管見』（1698年）から借用しているのであるが、コリアーのこの著において、自らの評論文「音楽について」に敷衍しつつ、音楽の検閲制度の導入を提案している——「音楽は火薬とほとんど同じくらいに危険であって、出版や造幣に勝るとも劣らぬほど注意して扱う必要があるのではないだろうか。公的に規制を行なったとしても誤りではないかもしれない⁽¹⁶⁾」。コリアーの『管見』は1730年には第5版にまで達しており、「音楽について」を含む『評論集』も1731年までに7回の重版を見ている。そして1737年、他の舞台芸術とともに音楽の上演についても本当に検閲が導入されるのである⁽¹⁷⁾。

器楽

礼拝に関するエリザベス朝時代の法律は、非典礼的な音楽の使用を念頭に置いたものとなっていた——「文意が把握かつ理解できる」のであるならば「讃美歌あるいはそれに類する歌を、全能の神を誉め讃えて、適切に案出されうる最善の調べと響きを使って」云々という条文が見られる。⁽¹⁸⁾ 礼拝においては御言葉こそが至上であるという強い思いが、器楽曲に対する根強いピューリタンの反感を助長していた。逆に、教会堂にオルガンを備え付けたり聖セシリア（「声を出す器^{オルガン}の創始者」）の祝日を祝ったりする際の説教は、躍起になって次のように器楽を擁護した。

確かに豎琴とオルガンは不浄で邪惡な民であるカインの末裔の一人によって創始されたものではあるが、神はこれらを宗教的な用途のために聖別して、教会にとっては大いに誉れある楽器とし、ご自分の民の信仰心を大いに掻き立てる楽器とされた。もしもこれらが生み出す崇高なる調和の旋律に我々が心動かさないとしたら、我々の宗教がそのような手助けを必要としないほど高速であることの表れではなく、我々の情緒が低劣すぎてそのような向上に堪え得ないことを示すものである。もし我々の魂がダビデの魂ほど敬神的であったなら、同じほど音楽的でもあろうことは疑うべくもない。⁽¹⁹⁾

世俗音楽の改革を志す者たちが前章で述べていたように、この聖セシリアの日の説教を行なったこの人物チャールズ・ヒックマンも、（他の多くの説教者たちと同様で）感情の動きを通じて心と魂へと達する比類なき力のゆえに音楽を重んじている。礼拝そのものは決して冷徹な理性の営みではなく、「主を喜び誉め讃えるという法悦の中での、高揚した愛の作用、燃え上がる願望の発露、敬虔なる魂の呼吸」であって、これらは「我々に具わった感受性」から生じるものであるが、「これは人間の頭ではなく心に存しており、あまりにも深いところにあってつかめず、あまりにも繊細であるため理性などという粗野な能力によって動かされることもない」。しかし、哲学者や道学者たちにはできないところで、音楽は大勝

利を収める。我々の感性を貫いて

まさに感情の中枢にまで達する。上手に作曲され、巧みに活気づけられた音楽には、我々のあらゆる感情を奮い立たせ、あらゆる感情に命じて自分に跪かせるが如き魅力がある。そして、分別ある魂ならばその命令を拒むことはできない。……否、これは我々の感情にだけ働きかける魅力ではなく、我々の理解力にも作用する。人間の心のみならず頭にも活力を与え、我々の耳と同時に目も開かせるのだ。我々の思考がつまらぬ物事にかかずらい、物憂さと感覚の遅鈍さのために我々の精神が淀んでしまったとき、音楽が我々の魂を奮起させ、我々の思考を回転させてくれる。まさに我々の理性そのものが、^{リュート} ^{ハーブ} 琵琶と豎琴の音で目を覚ます。そして歌が、なにやら神聖な靈感の如くに、我々の持つより快活なあらゆる能力を呼び起こして、それらの務めを果たさせるのである。

ここでは、音楽が我々の合理的判断力を圧倒してしまうという非難に対抗して、適切な種類の音楽ならば逆にこれを活気づけるという主張がなされている。歌詞を伴わない場合でさえも、音楽は我々の「より快活な能力」を解き放って刺激すると言うのである。最良の宗教音楽は純化されたものであると同時に純化するものであり、魂を高揚させるものである、というヒックマンの主張は、ヘンデルの教会用作品およびオラトリオに関する同時代人の論評の多くにおいて支持されている。⁽²⁰⁾しかし同時に、教会音楽の作曲家が何を提供すべきかを規定した音楽説教の説教者たちは、器楽曲の脅威^{とろ}に対して敏感になっていた。それは、器楽曲は「あまりに感動的であって、心を蕩けさせてしまい、旋律に乗せて伝えようとする事柄の内容への注意を、まさにその旋律の優美さによって殺いでしまうことになるのではないか」⁽²¹⁾という脅威である。

神の楽器

ヘンデルがオルガンの名手であるという自らの名声を利用したこと、特にオラトリオ制作の時期にそうしたこととの関連においては、以下の点に注目してみる

と面白い。つまり、教会における器楽演奏について書かれた夥しい18世紀前半の文書中に、その当時流行のオルガン曲の作曲様式および演奏様式に焦点を当てた文献が、相当数存在しているのである。保守的な教会人は不平を鳴らした——オルガンは神聖な礼拝のための特別な楽器ではあるけれど、これをオルガニストたちは音楽的な名利と自己顕示の道具にしており、演奏の腕前を誇示しようとして不適切かつ不相応な様式で典礼の途中に即興曲^{ヴォランタリー}を用いている、と。

1733年、グレート・ヤーマスの教会堂にオルガンが設置された際に説教をしたトーマス・マクロにとって、器楽曲とは「宗教の尊厳が高められ、人々が教化されるための」手段であった。そのための最も効果的な楽器がオルガンなのであって、これは「あらゆる楽器のなかで最も包括的であり、そのゆえに聖所^{サンクチュアリ}での典礼を占有し、神の家における神の楽器とされてきたのである」。オルガンはそれほどまで聖化されたものであるから、「それが奏でる音の調べは、はしゃいだ、浮薄な、滑稽なものであってはならない。そんなことになると、思いは散らされ、注意力が掻き乱されてしまうからである」。「我々に具わった最良の感情を高め、燃え立たせるという役割を果たすことができるように」、オルガンの調べは常に「純粹にして神々しい事柄に、またその調べに合わせて歌われる詩篇や讃美歌⁽²²⁾の崇高にして荘嚴なる様式に、適合したもの」であるべきだ、というわけである。音楽と道徳について書いた宣誓拒否者の作家アーサー・ベッドフォードは、歴史的な伝統の純粹性を保持する運動を精力的に繰り広げた人物に相応しく、当時の教会でのオルガン演奏について次のように激烈な論評を残している。

以下の点以外に、素面^{しらふ}で幾許かでもそれを理解できるような人間を私は知らない。すなわち、混乱の極みの意味不明な表現ばかりであり、あらゆる音階が出鱈目に並んでいて、終止形も連結もあつたものではなく、気紛れで浮薄な幻想曲と重々しく浅ましい演奏が時々混じり合っているということ以外には。……かくして神の家の音楽はまさに、バッカスを讃える異教徒によって作曲され、酩酊した乱痴気騒ぎで歌われる酒神礼讃⁽²³⁾の狂乱詩の如くになり果てている。

このような懸念は、ただ聖職者だけに限られたものではなかった。教会における

即興曲の華美な演奏技法は、一般会衆をも困惑させるものであった——「ある者たちが教会へ通うのは／教えを求めるからではなく、そこで音楽を聴きたいがため⁽²⁴⁾」。この楽器の王者が振った人々を魅了する力は絶大で、増幅され合成された電子音の時代に生きる我々には容易には理解できないほどである。専門の音楽家たちでさえ批判的であった。チャールズ・エイヴィソンは「理性的な聴き手の誰をもむかつかせ、真の宗教心を高めるのではなく掻き散らしてしまう、即興曲におけるあの愚かしい演奏手腕の誇示」を嘆いている。彼は長い脚注を施して、典礼の言葉遣いに即した対応ができるよう、オルガニストは詩に対して敏感であるべしと主張する。また、即興曲直前の「莊嚴にして感情を込めた口調で発せられる」詩篇を傾聴するようにと命じており、「自分の役割に取りかかり、嚴かな物腰で、穏やかで健全なる心を、敬虔なる快活さをもって楽しませるのは、そののちでなければならない」と言う。さらに、オルガニスト本人も敬虔な人物でなくてはならない。「自分自身がこの神聖なる活力^{エネルギー}を己の胸の内に感じていないのであれば、他者の心の中の活力を増進させようとするなど、無駄な努力⁽²⁵⁾ということになる」からである。

1735年から現役生活を終えるまでの間のオラトリオ興行において、ヘンデルは自らのオルガニストとしての腕前をまさに公演の中心的な呼び物にしていた。幕間に自作のオルガン協奏曲を演奏したのである。ヘンデルのオラトリオ——ヘンデルが考案したとおりの、彼の観客が聴いていたままのオラトリオ——の本質を考察したければ、我々はこの決定的な点を無視するわけにはいかない。ディーンが指摘するように、「協奏曲は、名人技が披露される場面を作り出すのに役立っていた。これはオペラにおいてはカストラートその他の大歌手たちによって提供されていた要素である。場合によってはオラトリオそのものよりも、こちらの要素のほうにより大きな客寄せ効果があったらしい。公演予告、特に人気が落ちてきたオラトリオ作品の予告においては、非常に目を引くかたちで宣伝されているのである。……オルガン協奏曲の一大特徴はヘンデルによる独奏部分の即興演奏⁽²⁶⁾で……これは、上演のたびに異なっていた」。興行主としてのヘンデルの如才のなさを示す見事な好例である。イングランドの音楽愛好家たちはオルガン演奏の妙技を聴きたくは思っていたが、教会でそれを聴くことには気のとがめを覚える者が多かった。そこでヘンデルは、これを劇場へと移植したわけである。劇場で

ならば、宗教心の妨げになるなどという文句は誰も言えない。それでもヘンデルは、劇場という場所でオルガンを聴くことについて敬虔な人々が感じるかもしれない後ろめたさを軽減するべく、オルガンを最も世俗的ではない作品の上演に結びつけた——オラトリオである。

同時代の記録が示すところによると、音楽を愛するイングランドの聴衆たちのあいだでヘンデルがその名声を確立したのは、オペラの作曲にもまして、オルガンの演奏を通してであったようである。ヘンデルに対して書かれた詩で、分かっている数多くの作品のうちの最初のは、かつて王室付きの司祭であったダニエル・プラットによる『ヘンデル氏への頌歌——氏のオルガン演奏に接して』⁽²⁷⁾ (1722) である。かなりの長さ (160行) を持ち、その後ヘンデルの音楽が大衆から受けることになる評価の主要なものを予示しているだけでなく、少なからぬヘンデルの英語作品の主題をも予見する内容となっているこの称揚詩は、ヘンデルを、その演奏によって聴く者の感情を掻き立て、操り、支配する者、ある打ってつけの効果をもたらす人物として描写している。その効果は、音楽を論じる数多くの著述家たちが求めたものであったのだが、彼らはこれを最良の宗教音楽が獲得した効果として引き合いに出していた。その効果とは、高揚した超越的な恍惚であり、その中にあっては、

それぞれの不安な感情は、穏やかに宥められて平安へと至り、
ただ沈黙の思考が止まることなきが如くに見えるのみ。

というような状態である。まさしくオルガンは音楽と言う神聖な芸術の楽器なのであり、プラットはヘンデルをオルフェウスに見立てるという定番の比喻に気の利いたひねりを加え、オルガンに異を唱える——なお無視のできない有力な存在としての——対抗相手たちを、「かのトラキアの詩人〔訳注：オルフェウスのこと〕を裂き殺した女たち」と引き比べるという手法を用いている。「様々な楽器が一体となったもの」としてオルガンは、「天使の如く清らかな歓喜の、祝福された具現化」——つまり、まさにオラトリオにおける感謝・讃美の合唱がそうであるように、我々が加わりたいと願う天上での讃美の合唱を地上において表現したもの——を提供してくれる。そしてヘンデルがこれに「軽快に触れること」に

より、個人個人の情念が正されるだけでなく、国全体の混乱が収まるのである（本書第9章を参照）。

神殿音楽としての聖堂音楽

複雑で洗練されたかたちの教会音楽——「聖堂音楽」——の擁護者たちは、自然、器楽の使用だけでなく伴奏つき声楽曲の擁護もしなければならなかった。三聖歌隊祭において定期的に行われた説教は、単に音楽家の芸術を賞讃するだけのものではなく、それを礼拝において利用することを擁護し、その利用法を規定するものでもあった。これらの説教は、過去30年間における聖セシリア祭日の諸説教を継承するもので、主張するところは同じである。常に繰り返し主張されていた意見を示す標準的な例として、1720年、ヘリフォード大聖堂における最初の三聖歌隊祭で教区尚書院長トーマス・ビセが行なった説教を取り上げることができよう。ビセが言うところはこうである。キリスト教の礼拝の主要素は讃美である。最良の表現方法は、言葉と音楽によるものである。音楽に敏感であるということは短所ではなく、神からの賜物である。地上の礼拝における音楽は、天上の音楽を前もって味わわせてくれる（ヨハネの黙示録5章14節）。音楽は感情を純化し、宗教心を喚起し、回心者を生むこともできる（聖アウグスティヌス）。聖バシレイオスは、人間を徳へと導くために音楽を用いることを許した。楽器は歌声を支えるために用いることができる。音楽家も会衆も、敬虔な思いをもって音楽の霊的な用途のみに心を注がなければならない。歌い手たちは歌詞を明瞭に発しななければならない。そして、音楽は然るべき厳粛さと荘厳さを具えているべきである。⁽²⁸⁾——以上の決まり文句を、どの説教もかわるがわるに繰り返して、宗教的内容の歌詞に曲を付けることについてのイングランド教会の考え方の規範を保持した。その骨子は、宗教句への曲付けは価値のある努力であり、その努力の産物は明確に「昔ながらの」^{オールド・ファッションド}教会的表現形式を具えているべきである、というものであった。ヘンデルはオラトリオの合唱において、同時代の人々が教会様式であると認識する様式で宗教的な歌詞に曲をつけているが、それはこの規定を充たすためなのであった。そしてまさしくこれは規定だったのである。教会音楽を擁護する必要が、歌詞と音楽から成る宗教的な作品の制作を奨励する文献を生み出したわけである。

このような状況そのものがオラトリオの発展を助長するものだったわけであるが、聖書の中から先例を引いて宗教的な音楽を是認する説教のなかには、さらに明白な指標を提供してくれるものもあった。《エジプトのイスラエル人》初演の前年、トーマス・ペインによる三聖歌隊祭の説教が行われたが、その中でペインは、礼拝における音楽の使用を神が認めていることを示す旧約聖書中の定番の証拠——特に「ユダヤ教制度下、神を讃美する式典をより壮大なものとするために、それが指定されていること」のなかに明白に示されている——を取り上げて、延々と熱弁を振るった。とりわけ、「ファラオとその軍勢の転覆に際して、すべてのイスラエルの子らがモーセの歌をうたったとき、女預言者ミリアムがこれに応え、女たちの一団と共に、てんでに小太鼓を携えて歌った。『主に向かって歌え、主は輝かしき大勝利を収められた』と」（脚注には出エジプト記15章20、21節への参照指示がある）という箇所が注目に値しよう。よく引き合いに出されたこの例に加え、同じく一般的なダビデとソロモンに関わる例を引いたのち、ペインはさらに明白に器楽の弁護に転じている——「イスラエルの子らは、荒野においてもカナンの地においても、聖なる務めを果たす際、歌声のみならず楽器による音楽を用いはしなかっただろうか」。モーセは他のエジプトの技芸とともに音楽も学んだに違はなく、

我々は、神がモーセをご自分の民であるイスラエルの指導者とし、モーセの手によって民を奴隸の家から解放するという偉業を行われると、すぐに民が自分たちの解放者に和して、その喜ばしき出来事に際して彼が作ったあの高貴な誉め歌をうたう場面を見る。しかも、（すでに見たように）この歌を彼らは、自分たちの救いの神に向かって、楽器の助けを借りながら、2つの合唱群に分かれて交互に歌ったのである。そして（ミリアムも全会衆もそうであったように）モーセも——あれほど際立って神に重用された男、神がご自分の似姿と徳性とを刻みつけてから間もない男、エジプトの地で、また紅海において、神があのような御業と奇跡^{みわざ}を行うためにお用いになった男、あのモーセも——誤った判断をし、相応しい讃美と感謝の献げ物を供えることなく、苦しみの中で恐ろしく忌まわしい所業に及んで、肉欲的で唯物的な許されざる方式の礼拝に参

加しただろうか。もしそうであったならば必ず、見逃されることなく、神のご不興を示す出来事が即座に起こっていたであろうし、また、そのあとすぐにモーセだけが人類で唯一、神と自由に言葉を交わすという榮譽に与り、人間が友に語るかのように主が顔と顔を⁽²⁹⁾合わせて語りかけてくださるという光榮に浴することはなかったであろう。

この文章から考えると、『エジプトのイスラエル人』の終結部を構成する「モーセの歌」の新しい存在理由が見えてくる。詩歌における宗教的崇高性（本書第4章を参照）を示す第一級の例としてだけでなく、イングランド教会の大聖堂で行われているのと同様に聖なる礼拝において声楽および器楽を用いることを神が是認した原初の例として、曲を付けるだけの価値があるというわけである（ペインはわざと「モーセの歌」を、伴奏付きで2つの合唱隊が交誦するという大聖堂様式の、まさに前触れとして記述している）。台本中の主要登場人物と彼らがその中で果たす役割が、この説教の慣習の中にすでに見出される。すなわち、紅海におけるモーセ（『エジプトのイスラエル人』の最終部分）、詩篇の作者たるダビデ（『サウル』において、王の心を落ち着かせようとする場面でそのように描写される）、神殿礼拝の創始者ソロモン（『ソロモン』の最初の部分）という具合である。

教会音楽に影響を与えるような宗派分離論争に通曉した会衆にとっては、これらの緒例は神が声楽や器楽の使用を是認したという証拠以上のものであった。実は、これらを是認の例として引証すること自体が論争の種なのであった。
ディセンター
 非国教徒の一部によると、これらはイエスの教えに取って代わられた旧秩序に関わるものであるから、無意味かつ無効な例証なのであった。これらは比喩的に解釈しなければならない、と彼らは主張した。音楽は物理的にではなく、心の中で発せられるべきものである、と。特に器楽はユダヤ教の礼拝における儀式的な付属物であって、初期のキリスト教会はこれを用いるようなまねを決してしていない、と言うのである。ディセンターたちは中世の教会にも器楽が存在していたことを引き合いに出してはいるが、それは聖別された伝統の連続性を言うためではなく、教会が腐敗していたことの証拠としてであった。この手の主張に反駁することも、イングランド教会の慣行を擁護する音楽説教が有していた標準的な

特色であり、この点においてもまた、大聖堂の音楽を支持する主張が量産されている。例えばピセも典型的な議論を展開し、教会音楽は「勝利に満ちた教会を誉め讃えるに際しての調和の^{ハーモニー}前兆つまり予型以外の何ものでもなく」、そうであるならば継続されて然るべきであると言ひ、神殿での音楽についての定めが、廃止すべきユダヤ教の律法の一部として新約聖書記者たちによって取り上げられたことも決してない、と述べている。⁽³⁰⁾

ある教会人たちの一派は、大聖堂での慣行と神殿での礼拝とを重ね合わせることに特別な関心を寄せていた。^{ハン・ジューラー}宣誓拒否者たちが、礼拝の様式も含めた教会の在り方を純粋で「^{プリミティヴ}原初的な」ものへ回帰させようとする動きを、強く擁護したのである。⁽³¹⁾この目的に沿って彼らは大聖堂での慣行、特に2つの合唱隊による讃美歌詠唱の起源を辿り、バビロン捕囚以前のユダヤ教の神殿における讃美歌詠唱にまで行き着いたのであるが、彼らの指摘によると、これには器楽による伴奏が付いていた。アーサー・ベッドフォードは1706年、大聖堂音楽を擁護するために次の学術的弁明書を著わしている。『神殿の音楽、あるいはバビロン捕囚以前における神殿でのダビデの詩篇の歌われ方に関する小論。ここにおいては我々の大聖堂の音楽が正当化され、その音楽が原初のキリスト教徒たちの慣行のみならず、過去のあらゆる時代の教会の慣習にも準拠したものである旨が論考される』である。当然ながらベッドフォードは、この初代教会からの継承物はキリストの到来によって破棄されるべきユダヤ教の儀式には含まれていなかったという主張を支持しているが、さらに一歩踏み込んで、ユダヤ教の行き方は古代の音楽慣行の頂点であって今日における最良の慣行を予示するものであったと見なしている。これは単なる好古趣味ではない。神殿に起源を発すると確認しうる慣行を保持することは、ユダヤ人たちの改宗を早める手段の1つであると考えられており、イングランドにおいてその端緒が開かれるべきであると望まれていたのであって、これは特に宣誓拒否者たちの間で⁽³²⁾真剣に奉じられた信念だったのである。ベッドフォードは、ソロモン治世下での神殿音楽の実質がいかなるものであったとしても、当時の世界においては最良のものであったと確信していた。ことによると「シバの女王を彼女の国から到来せしめた動機は、この点に関する好奇心を満足させることであって、神殿を見ることに勝るとも劣らず音楽を聴くことが目的だったのかもしれない」とベッドフォードは示唆している（これは《ソロモン》第3部における仮面

劇のヒントとなった可能性もある）。

ベッドフォードは自分の主張のすべてを証明できるわけではないと潔く認めつつも、（他の多くの教会音楽擁護者と同様、しかし遥かに詳細に）当時の大聖堂における讃美歌詠唱を、ユダヤ教とキリスト教双方の古代の礼拝の慣行に合致しているという理由に基づいて正当化している。ベッドフォードの詩編の扱いは広範にして熱烈、かつ進歩的であった。旧約聖書を一般の文学の如く鑑賞することの基礎を築いたと見なされているロバート・ラウスより半世紀近くも前に、詩編の修辞、韻律、詩形の分析に30頁以上を費やしているのである。⁽³³⁾ 次章において見るように、ラウス以前の文芸評論家たちも詩編を批評的鑑賞の対象範囲に含めていたのだ。合唱の歌詞の出典として詩編に非常に大きく依存するなかで、オラトリオの台本作家たちは（この場合もそうであるように）馴染みの薄い素材を発掘するのではなく、イングランド教会の礼拝で用いられているというだけでなく当時の批評的関心の的でもあった素材を共有していたのである。またベッドフォードだけがユダヤ教の神殿における音楽を求める主張を行なっていたわけでもない。1724年、歴史家のニコラス・ティンダルは『聖のおよび冒瀆的な古代の所産、あるいは新約・旧約聖書に関する綿密かつ批評的な論考集』（主としてベネディクト会修道士オギュスタン・カルメーの著作を翻訳したもの）を出版しているが、これには「古代の音楽、特にヘブライの音楽に関する論考」が含まれていて、神殿の音楽は現今の音楽に劣ってはならず、却ってより感動的であると論じられている。ベッドフォードの『神殿の音楽』第9章はそれぞれの詩篇が示唆する音楽の種類を論じており、39の実際の譜例を載せているが、これは神殿での讃美歌詠唱法を著者自らが推理して再現したものであった。（過去の作曲家や作曲様式の復権によって音楽を、ひいては道徳・作法を、刷新するべきであると論じ、さらに神殿音楽についても論及した次著の『音楽の大誤用』においてベッドフォードは、教会の外で讃美歌を歌うことを推奨しており、彼以前の、宗教改革時代の教会人たち同様、それが社会を腐敗させている「不敬でみだらで冒瀆的な歌」に取って代わることを期待している。⁽³⁴⁾）

ベッドフォードや他のイングランド教会擁護者たちは、神聖な音楽には効用があるとする支配的な信念と、古代ユダヤ教および初期キリスト教の礼拝の慣行に張り合おうとする欲求とを結合させたのであるが、シャピロが指摘するように、

それは「聖書の民が経験したような神との交わりを達成するためであって……古代イスラエル人たちの崇高な伝統において神を讃美することにより、イングランド人たちはキリスト教の救いの神により近づくことを望んだ⁽³⁵⁾」からであった。当時の教会音楽の慣行を強力に擁護する行為は、その慣行を古代ユダヤ教の神殿における音楽礼拝と関連づけた。そして、オラトリオの中のイスラエル人たちが、入念に作り上げられた合唱（その多くは2つの合唱隊によって歌われた）において、神に誉め歌を献げるのを見聞きするヘンデルの聴衆は、自分たちの礼拝形式が正当であることを想起し、自分たちこそが今の世界における神の選民であるという自己認識を強くしていたわけである。この意味において——ほかに多くの要素（本書第2部で論じる）があるが——、オラトリオに登場するイスラエルの民は、当時の人々にとって自らの^{イメージ}似姿として真に関心の的だったのである。イングランド教会の音楽を擁護する者たちは、以下の点も強調した。すなわち、アンセムの元となったもの——讃美歌、詩篇および靈歌——を歌うことは、迫害を受けていた頃の原始キリスト教会の特徴の1つであった、という点である。⁽³⁶⁾ 言わば逆成法的な考え方によって、このことは、迫害によって危機に瀕しているイスラエル人を描写するアンセムをオラトリオの中に置くという用法（例えば《エステル》など）に奇妙な妥当性を与えることになるが、これは、困難と闘うユダヤ教会と同じく困難に立ち向かっているイングランド教会とを重ねて見る聴衆にとっては、2重の意味で妥当なことなのであった（本書第6章も参照）。

アンセムとオラトリオ台本

ベッドフォードは大聖堂の音楽の擁護を古代の先例に基づいて展開してはいるが、自分と同じ時代の音楽についても、ある部分に関しては偏見のない考え方をしているところもあり、そのような部分を彼は単なる新趣向とだけ見るのではなく、改良であるとも考えていた。繰り返しやメリスマは「今日の我々の音楽が持つ美点のうちに数えても差し支えない」のであり、「複数の楽器が同時に演奏する^{コンソート}合奏曲が醸し出す^{ハーモニー}調和は……あらゆる音楽のなかの真の精華である」と言っている。実際、大聖堂の音楽の強みの1つは、それがアンセムにおいて作曲家に与える、「技量あるいは想像力が生み出しうる最良の曲を用い」、考えうる限りで最

良の音楽を提供することによって、不相応な状況においてそれを求めようとする誘惑を挫くことのできる自由なのであって、そのことによって「音楽を喜びとする人々が……一時にして、耳を楽しませつつ魂を高めるという機会を得ることが出来る」のである。それは、大聖堂が「イングランドにおいて唯一、（教会音楽との関連で言うと）古代のパン屑を、少しも無駄にすることがないように拾い集めてきた、また同時に、腕の良い芸術家が全く自由に時代の許しうる最高の改良を行うのを許容してきた、イングランドにおける唯一の場所」だからである。別言するならば大聖堂のアンセムには、聴く者にとって、霊的経験へと誘ってくれるものであると同時に芸術的達成の極致でもあるという、2重の価値があったということである。アンセムはヘンデルのオラトリオの成り立ちに大きな影響を及ぼしたものの1つ、オラトリオを構成する主要素の1つと認められてきたものであるから、オラトリオ台本と18世紀のアンセムの歌詞の関係について、ここで考察を加えておくことは適切であろう。

イングランド教会のアンセムは、独唱者や合唱団のために旧約聖書や時には聖書外典および新約聖書からの歌詞に曲を付けているという点において、ヘンデルのオラトリオの先駆的存在である。規模において、歌詞と音楽の複雑さの点で、また力強さを必要とする点において、アンセムのなかでも最もオラトリオに近いものは、ヴァース・アンセム〔訳注2〕（つまり独唱者と合唱団のためのアンセム）で、これらは王室の施設チャペル・ロイヤル（王室礼拝堂、ウェストミンスター寺院、ウィンザー城の聖ジョージ礼拝堂）、聖歌隊を附設する大聖堂（イングランドに22、ウェールズに2、アイルランドに4乃至5が存在した）、オックスフォードとケンブリッジの5つのカレッジ、それに私有の1施設のために作られたものであった。その私有施設というのはシャンドス公爵が所有するもので、ヘンデルは彼のために11曲のシャンドス・アンセムを作曲している。ヘンデルが英語の歌詞に曲を付けた作品群からオラトリオを除くと、その大部分はアンセムが占めている。最初にオラトリオ作品を公演した頃までに、ヘンデルは既に21曲のアンセム（手直した作品も含む）を作曲し、テ・デウム4曲とユビラーテ2曲も作っていた。彼のオラトリオのなかには、程度は様々に異なるが、自作アンセムの曲と曲とが、時には歌詞と歌詞とが、接ぎ合わされて出来上がっているものもある。公演用版《エステル》には2曲の戴冠式アンセムは登場しているし、《デボラ》には戴冠式アンセム2曲と

シャンドス・アンセム4曲が、そして《アタリア》には戴冠式アンセムの中の1曲が姿を見せている。《エジプトのイスラエル人》の第1幕は、《アン女王の葬送式アンセム》を借用しているが、これは《サウル》の挽歌として構想されたものの却下されていた曲であった。《ベルシャザール》はシャンドス・アンセムのうちの2曲を使用しており（本書の序説で引用したヘンデルとジェネンズの手紙のやりとりを参照）、《機会オラトリオ》は戴冠式アンセムの1曲を用いている⁽³⁹⁾。他のアンセムにも、結合されて新しく再生されたものがある。芸術的側面についての論考はさておき、ヘンデルには、自作のアンセムおよび自らのアンセムの様式をオラトリオへと昇華させるべき市場戦略上の素晴らしい理由があった。大衆がこれを愛したのである。戴冠式および他の国家的な儀式のためのヘンデルのアンセムは、当時の一大盛儀であって、それぞれの出来事が生み出した共同体的な高揚感に適合した音楽を作り、その高揚をさらに高い水準にまで引き上げる働きをした。ディレイニー夫人はデッティンゲン・テ・デウムを聴いたあとで、「それは甚だしく素晴らしいもので、私は完全に恍惚となりました。……みんな彼の作曲したなかで最高の傑作だと言っています」と記しているが、これは一般に共有されていた感想である。

ヘンデルのアンセムの音楽的構造と、イングランドの先人および同時代人によるアンセムの音楽的構造については、多少なりともオラトリオの音楽的起源を評価する中で考察がなされるべきではあるが、ここでの我々の関心は言語的構成のほうにある⁽¹²⁾。いざ実際に演奏するという段になると、いずれにしても音楽のほうは現実的であるよりも観念的な存在であることが多かった。と言うのは、聖歌隊員たちの参加があまりにも少ないため、会衆は必ずしも作曲家が作ったとおりの音楽を耳にしていたわけではなかったからである。しかし、聖歌隊を備えた施設での礼拝で使用することを目的としたアンセムの歌詞ならば、歌詞集を購入する金を持った者ならば誰でも実際に目の当たりにすることができた。アンセムの歌詞集は、ヘンデルがオラトリオ制作をしていた期間中、以下の題名で1724年、1736年、1749年の3度にわたって出版がなされている⁽⁴³⁾。それは『アンセム集——今日、国王陛下の王室礼拝堂その他において演奏されるままの』というもので、「附録——ロンドン聖パウロ大聖堂、聖ペテロ教会、ウェストミンスター、およびその他のイングランドとアイルランドの主教座聖堂ならびに共住聖職聖堂に於

いて用いられるアンセムの選集」が付されていた。これらは、16世紀、17世紀および18世紀のイングランド教会におけるアンセム歌詞の編集の技巧を示す模様見本帳として、それ自体が素晴らしい研究対象となるものである（取り上げられている作曲家はタリスからボイスにまで及ぶ）。しかしまた、アンセムとオラトリオにおける歌詞の関連性を浮き彫りにしてくれるものでもある。これらを見ると特に、既存の、アンセムを作曲する際の聖書の言葉の扱い方が、オラトリオの台本作家たちには前例として役立ったことが分かる。⁽⁴⁴⁾

アンセムの歌詞は圧倒的な割合で旧約聖書、とりわけ欽定訳および祈祷書所収の訳による詩編から引用されており（表1を参照）、このことによってオラトリオの題材——イスラエルの民の歴史および心情——は、聖歌隊を使った礼拝に出席する者ならば誰でもが身近に感じる作曲用の素材となっている。アンセムの歌詞に取り込まれた詩編からの詞材は、数多くのオラトリオの合唱においても用いられている。神の畏るべき力、自然への神の驚くべき業、邪悪な敵の手からの神による民の救出、民に対する神の絶えざる慈しみ、民の至らなさと恐れと希望、民から神への懇願、神に対する民の感謝、民が負う神への讃美の務め、という具合である。最も重要なのは、アンセムが聖書を利用するに際して、内容に周到的な注意を払いながらも、さらに注目すべきことに、ある種の自由裁量を持ってそれを行なっているという点である。これは、聖句を精選し、変更を加え、重ね合わせるというオラトリオの台本作家たちの慣例を予感させる（本書第10章を参照）。

表1 1724～1749年のアンセム集における典拠資料の利用

	1724年	1736年	1749年
典拠資料総数	183	247	270
	%	%	%
旧約および旧約外典の聖句	97	97.5	95
詩篇の聖句	91	92	90
典拠資料の断片的利用	34.5	31	33.5
典拠資料の逐語の利用	34	31.5	32.5
逐語の利用＋末尾に ‘Hallelujah’	10	7	7.5
並べ替えあるいは資料の複合	30	32	32.5

明瞭で繰り返しが無いことを命じた宗教改革期の「エリザベスの宗教解決」の精神（「歌うのではなく読まれているかのように、容易に理解ができるような……適度で明瞭な歌」）^{〔訳注3〕}を受け継いで、聖なる言葉に手を加えないことが重んじられていたにもかかわらず、表1が示すように、聖書および祈祷書所収詩篇の1箇所だけから逐語的に引用された聖句に曲を付けたアンセムは、少数派に属する。

聖書あるいは祈祷書の文言に変更を加えずに曲付けしているアンセムの数は、末尾に「ハレルヤ」が付加されている場合も含めたとしても、半分を下回る（アンセムを「ハレルヤ」で終わらせる慣習が、おそらく、ヘンデルのオラトリオにハレルヤ合唱が頻出することの起源であろう——ハレルヤ合唱は18のオラトリオのうちの12において見られ、「アンセム」と銘打たれた合唱を締めくくっている場合もある）。改変はその性質の違いによって何種類かに分けられる。単純で自由裁量度の低いものから順に並べると、次のようになる。

- （1）時制あるいは人称の変更。〔例〕未来形を過去形に、二人称を三人称に。
 - （2）省略。〔例〕1つの節あるいは複数にわたる節の最初と最後のみを利用。
 - （3）圧縮。2つの節の部分と部分を「糊づけ」。〔例〕1つの節の前半と別の節の後半を結合。
 - （4）取捨選択。単一の詩篇あるいは章から直接には繋がっていない節が選ばれるが、順序はそのまま。
 - （5）取捨選択して並べ替え。単一の詩篇あるいは章から節が選ばれ、さらに順序も変えられる。
 - （6）聖句の「コラージュ」。複数の詩篇あるいは聖書のなかの複数の書からの逐語的な引用聖句の寄せ集め。
 - （7）上記（6）と同じだが、1つあるいは複数の節の繰り返しを含む。
- （1）から（3）は（4）から（7）の中においても起こる。

表2の具体例が示すように、ヘンデルのイングランドの先達たちも、また同じくイングランドの同時代人たちも、このような手法を用いていた。

その修辭的効果には際立ったものがある。時制の変更によっては、神の約束をすでに成就した事実とすることができ。省略は、特定の状況を取り去ることができるので、出来事が一般化されて聴衆の現実と関わりのあるものとして理解されることを可能にする（表2-2を参照されたい。イスラエル人の砂漠での彷徨およびシナイでの諸経験が省略されてしまっている）。このことは、広く重んじられていたアイザック・ワッツの提案と合致するものであった。すなわち、歌唱用の詩篇は、特定の古代イスラエル民族色を排除することによって、現在の礼拝参加者にとってより現実味を持ったものにするべきである、という主張である（本書第9章を参照）。極めて生き生きとした直喩は削除してしまうという編集法も、やはり一般化に役立った。そのやり方は20世紀の読者から見れば遺憾であろうが、神聖な礼拝の荘嚴さを保つためには不可欠と考えられたのであろう。具体例としては、表2-1において朝、羊飼いの天幕、機織り機の布、声を上げる鶴や燕が削除されていること、表2-5において神が戦士に、地上の住人がバツタに、天空が天幕に、ヤコブの種族が虫けらに擬えられているのが抹消されていることが挙げられる。なお表2-5はさらに、人称および時制の変更、そして圧縮の例も提供してくれている。マタイ、マルコ、ルカの3つの福音書からの引用句の組み合わせ（表2-3）によっては、福音書の調和を明示することができている。聖句を繰り返して用いるという自由裁量は、この当時なお非国教徒の一部からは異議を唱えられていたのであるが、音楽作りの面だけではなく、ある1つの概念だけを際立たせるのに有益である。これは台本編纂者たちの好んだ手法の1つで、オラトリオの台本構成に取り入れられた。1726年と1736年のアンセム集に登場する最初の24の歌詞のなかから無作為に選んでみると、ペルハム・ハンフリーズは詩篇23の1節、2節、1節、3節、1節、4節という具合に曲を付け、ワイズは詩篇57の9節、10節、9節、11節、9節、12節の順で曲を付けている。より手の込んだものとしては、表2-6にあるように、複数の節が繰り返される場合もある。そこでは5節、11節、16節が部分的にすべて繰り返される。5節が2回、11節と16節がそれぞれ3回づつである（しかもその順番は、聖書における順番と同じではない）。私が聖句の「コラージュ」と呼ぶ、最も創意工夫に富んだ手法は、特別な催しのために、その行事に然るべき焦点を合わせる目的で用いられることが多かった。例えばイトンのベンジャミン・ラムは、5月29日（チャール

ズ2世による王政復古の記念日)のために歌詞を編むにあたり、詩篇111の1節+118の24節、111の2-4節、71の17-18節、136の23節+25節、136の6節、138の4節および5節、136の26節を選び(+=圧縮を示す)、神の偉大さ、神の驚くべき業、神による敵からの民の救出と民に対する神の絶えざる慈しみ、神を讃美するという民の務めを語ることに成功しているが、これらは他の多くのアンセムと同様、多くのオラトリオの合唱において広く用いられた素材である。

表2 アンセムの歌詞と典拠資料の比較

KJB: King James Bible (欽定訳英語聖書)	
BCP: Book of Common Prayer (イングランド教会祈祷書)	
+: 圧縮された歌詞	
比較の便宜上、大文字・小文字の表記および綴りは現代風に改めてある。	
2-1. ジョン・ブロー John Blow (1649-1708)	
	<u>Anthem</u>
ヨブ記7章 20節	I have sinned; what shall I do unto thee, O thou preserver of men? why hast thou set me as a mark against thee, so that I am a burden to myself? (私は罪を犯しました。私があなたに対して何をするでしょうか、ああ人々を監視する方よ。何故あなたは、私をあなたの ^え 的にするのですか。そのため私は自分自身にとっての重荷となりました。)
ヨブ記7章 21節	And why dost thou not pardon my transgression, and take away mine iniquity? for now I shall sleep in the dust; and thou shalt seek me in the morning, but I shall not be. (何故あなたは私の ^{とが} 咎を赦さず、私の不義を取り除いて下さらないのですか。今や私は塵の中に眠ろうとしています。朝になってあなたが私を探しても、私はいないでしょう。)

イザヤ書 38章12節	Mine age is departed, and removed from me as a shepherd's tent: I have cut off like a weaver my life: he will cut me off with pining sickness: from day even to night wilt thou make an end of me. (私の寿命は消滅し、羊飼いの天幕のように私から取り去られてしまった。私は機織り機のように私の命を断ち切ってしまった。彼は責め苛む病をもって私を切り離す。昼からまさに夜に至るまで、あなたは私に止めを刺そうとされるでしょう。)	Mine age is departed and removed from me, thou wilt cut me off with pining sickness. (私の寿命は消滅し、私から取り去られてしまい、あなたは責め苛む病をもって私を切り離されるでしょう。)
イザヤ書 38章14節	Like a crane or a swallow, so did I chatter: I did mourn as a dove: mine eyes fail with looking upward: O lord, I am oppressed; undertake for me. (私は鶴や燕のように声を上げた。私は鳩のように呻いた。私の目は天を仰いで衰える。ああ主よ、私は虐げられています。私の請負人となって下さい。)	Mine eyes fail with looking upwards: I did mourn as a dove; O lord, I am oppressed, undertake for me, O Lord my God. (私の目は天を仰いで衰える。私は鳩のように呻いた。ああ主よ、私は虐げられています。私の請負人となって下さい。ああ我が神なる主よ。)
ヨブ記3章 20節	Wherefore is light given to him that is in misery, and life unto the bitter in soul; (なにゆえに苦しみの中にある者に光が与えられて、心を痛める者に命が与えられるのか。)	O wherefore is light given to him that is in misery, or life to the bitter in soul? (ああ、なにゆえに苦しみの中にある者に光が与えられ、あるいは心を痛める者に命が与えられるのか。)
ヨブ記3章 21節	Which long for death, but it cometh not; and dig for it more than for hid treasures; (彼らが死を望んでも死は訪れないで、死を求めて、隠された宝を求めるのよりもさらに土を掘る。)	Which long for death, but it cometh not; (彼らが死を望んでも死は訪れない。)
ヨブ記3章 22節	Which rejoice exceedingly, and are glad, when they can find the grave? (彼らは墓を見つけることができたとき、大いに喜び、嬉しがる。)	And rejoice exceedingly, when they can find the grave? (彼らは墓を見つけることができたとき、大いに喜ぶ。)
ヨブ記3章 23節	Why is light given to a man whose way is hid, and whom God hath hedged in? (何故、行く手を隠された人に、神が生け垣で囲ってしまわれた人に、光が与えられるのか。)	—

ヨブ記 3 章 24節	For my sighing cometh before I eat, and my roarings are poured out like the waters. (私の嘆きは 食事の前に到来し、私の喚きは奔流 のように湧き出てくる。)	For my sighing cometh before I eat, and my roarings are poured out like water. (私の嘆きは食事 の前に到来し、私の喚きは水のよう に湧き出てくる。)
----------------	--	--

2-2. モーリス・グリーン Maurice Greene (1696-1755)

	BCP	Anthem
詩編68篇 1 節	Let God arise, and let his enemies be scattered: let them also that hate him flee before him. (神が 立ち上がり、彼の敵どもが掻き散ら されるように。彼を憎む者たちが彼 の前から逃げ去るように。)	Let God arise, and let his enemies be scattered. (神が立ち上がり、彼 の敵どもが掻き散らされるように。)
詩編68篇 2 節	Like as the smoke vanisheth, so shalt thou drive them away; and like as wax melteth at the fire, so let the ungodly perish at the presence of God. (煙が消 え失せるように、あなたは彼らを追 い散らされます。そして蠟が火に接 して溶け去るように、神の御前にあっ て不信心な者たちが滅ぼされるよう に。)	Like as smoke vanisheth, as wax melteth at the fire, so let them perish and be driven away. (煙が消え失せるように、蠟が火に 接して溶け去るように、彼らが滅ぼ され、追い散らされるように。)
詩編68篇 7 節	O God, when thou wentest froth before the people: when thou wentest through the wilderness; (ああ神よ、あなたが人々に先立っ て進み行かれたとき、あなたが荒野 を進み行かれたとき、)	O God! when thou wentest forth, (ああ神よ！ あなたが進み行 かれたとき、)
詩編68篇 8 節	The earth shook, and the heavens dropped at the presence of God: even as Sinai also was moved at the presence of God, who is the God of Israel. (神の御前にあっ て地は振動し、天は雨を落としまし た——まさに神の御前でシナイ山が 揺り動かされたように。彼こそイス ラエルの神。)	The earth shook, and the heavens ropped at the presence of God, even the God of <i>Israel</i> . (神の御 前にあつて地は振動し、天は雨を落 としました。まさにイスラエルの神。)
詩編68篇 32節	Sing unto God, O ye kingdoms of the earth; O sing praises unto the Lord; (神に向かつて歌え、あ あ、お前たち地上の王国よ。ああ、 主に向かつて誉め歌をうたえ。)	Sing unto God, ye kingdoms of the earth: O sing praises unto the Lord. (神に向かつて歌え、お 前たち地上の王国よ。ああ、主に向 かつて誉め歌をうたえ。)

詩編68篇 20節	He is our God, even the God of whom cometh salvation: God is the Lord by whom we escape death. (彼は我々の神、まさに救いの源なる神である。神は我々が死を逃れる手段たる主である。)	Sing praises unto him who is God of our salvation. (我々の救いの神である彼に向って誉め歌をうたえ。)
詩編68篇 5節	He is a father of the fatherless, and defendeth the cause of the widows: even God in his holy habitation. (彼は父なき者たちの父であり、寡婦たちの訴えを保護する方であって、まさにその聖なる住まいにおられる神である。)	He is a father of the fatherless. (彼は父なき者たちの父である。)
詩編68篇 6節	He is the God that maketh men to be of one mind in an house, and bringeth the prisoners out of captivity: but letteth the runagates continue in scarceness. (彼は1つの家で人々の心を1つにし、囚人たちを囚われの状態から助け出し、背教者たちを欠乏の中につづけさせる神である。)	He bringeth the prisoners out of captivity. (彼は囚人たちを囚われの状態から助け出す。)
詩編68篇 35節	O God, wonderful art thou in the holy places: even the God of Israel, he will give strength and power unto his people; blessed be God. (ああ、神よ、あなたは聖なる場所にいまして靈妙。まさにイスラエルの神として、彼は強さと力とをその民にお与えになるだろう。神は誉むべきかな。)	Blessed be God. Hallelujah. (神は誉むべきかな。ハレルヤ。)

2-3. オーランド・ギボンズ Orlando Gibbons (1583-1625)

	<u>KJB</u>	<u>Anthem</u>
マタイによる福音書21章9節	And the multitudes that went before, and that followed, cried, saying, Hosanna to the Son of David: Blessed is he that cometh in the name of the Lord; Hosanna in the highest. (そして、前を行く群衆も、後につき従う群衆も、叫び声を上げて言った——ダビデの息子にホサナ、主の御名によって来る者に祝福あれ、最と高きところにホサナ。)	Hosanna to the Son of <i>David</i> : blessed is he that cometh in the name of the Lord. (ダビデの息子にホサナ。主の御名によって来る者に祝福あれ。)

マルコによる 福音書11 章10節	Blessed be the kingdom of our father David, that cometh in the name of the Lord: Hosanna in the highest. (主の御名によって来る、我らの父ダビデの王国に祝福あれ。最と高きところにホサナ。)	Blessed be the King of <i>Israel</i> , blessed be the kingdom that cometh in the Name of the Lord. (イスラエルの王に祝福あれ、主の御名によって来る王国に祝福あれ。)
ルカによる 福音書19章 38節	Saying, Blessed be the King that cometh in the name of the Lord: peace in heaven, and glory in the highest. (言った——主の御名によって来る王に祝福あれ、天には平和が、最と高きところには栄光があれ。)	Peace in heaven, and glory in the highest places; Hosanna in the highest heavens. (天には平和が、最と高き所には栄光があれ。最と高き天にホサナ。)

2-4. ジョージ・ホウムズ George Holmes (1721歿)
 《イングランド=スコットランド連合のアンセム》(部分)
Anthem for the Union of England and Scotland (part)

	<u>KJB</u>	<u>Anthem</u>
エゼキエル 書37章22節 +24節	And I will make them one nation in the land upon the mountains of Israel; and one king shall be king to them all: and they shall be no more two nations, neither shall they be divided into two kingdoms any more at all; . . . And my servant David shall be king over them; and they shall all have one shepherd: they shall also walk in my judgments, and observe my statutes, and do them. (そして私は、イスラエルの山々の上にあるその地で、彼らを1つの国と成し、1人の王を彼らすべてにとっての王とし、そして彼らはもう2つの国になることはなく、再び彼らが2つの王国に分裂することは決してない。……そして私の僕ダビデが彼らの王となり、彼らのすべてが1人の羊飼いを持つ。彼らは私の裁きの中を歩み、私の掟を守り行う。)	For the Lord will make them one nation in the land upon the mountains of <i>Israel</i> , and they shall have one shepherd: and my servant <i>David</i> shall be their king for ever. (主はイスラエルの山々の上にあるその地で、彼らを1つの国とし、彼らは1人の羊飼いを持ち、私の僕ダビデが永遠に彼らの王となる。)

2-5. モーリス・グリーン

	<u>KJB</u>	<u>Anthem</u>
イザヤ書 42章10節	Sing unto the Lord a new song, and his praise from the end of the earth, ye that go down to the sea, and all that is therein; the isles, and the inhabitants thereof. (主に向かって新しい歌をうたえ。そして地の果てから彼の讃歌を。お前たち海へ下る者どもよ、そしてその中のあるあらゆるものよ。島々よ、そしてその住人たちよ。)	Sing unto the Lord a new song, ye that go down to the sea; the isles, and the inhabitants thereof. (主に向かって新しい歌をうたえ。お前たち海へ下る者どもよ。島々よ、そしてその住人たちよ。)
イザヤ書42 章12節	Let them give glory unto the Lord, and declare his praise in the islands. (彼らに栄光を主へ歸せさせ、そして彼の誉れを島々に告げさせよ。)	Let them give glory unto the Lord, and declare his praise. (彼らに栄光を主へ歸せさせ、そして彼への讃美を告げさせよ。)
イザヤ書 42章13節	The Lord shall go forth as a mighty man, he shall stir up jealousy like a man of war: he shall cry, yea, roar; he shall prevail against his enemies. (主は勇者のように進み行き、彼は戦士のように熱情を喚起するであろう。彼は叫び、否、唸り声を上げるであろう。彼は彼の敵どもに勝利するであろう。)	The Lord shall go forth in his might; he shall prevail against his enemies: (主は力強く進み行くであろう。彼は彼の敵どもに勝利するであろう。)
イザヤ書 43章16節 〔印刷冊子 には明示さ れていない〕	Thus saith the Lord, which maketh a way in the sea, and a path in the mighty waters; (海の中に道を、広大な水の中に通路を通した主は、このように言う。)	the Lord, who maketh a way in the sea, and a path in the mighty waters. (海の中に道を、広大な水の中に通路を通した主は、このように言う。)
イザヤ書 40章22節	It is he that sitteth upon the circle of the earth, and the inhabitants thereof are as grasshoppers; that stretcheth out the heavens as a curtain, and spreadeth them out as a tent to dwell in: (地上の円蓋の上に坐すのは彼である。その住人たちはバッタのようなもの。天空を幕のように押し広げ、そこに住まうために天幕のように押し広げる。)	He sitteth upon the circle of the earth; he stretcheth out the heavens as a curtains; (彼は地の円蓋の上に坐す。彼は天空を幕のように押し広げる。)

マタイによる福音書 8章27節 〔マルコによる福音書 4章41節〕	But the men marvelled, saying, what manner of man is this, that even the winds and the sea obey him! (しかし男たちは驚愕して言った。この方はどういう人なのだろう、風や海さえも彼に従うとは。)	He speaketh the word, and the winds and sea obey his voice. (彼が言葉を語ると、風と海が彼の声に従う。)
イザヤ書 41章10節	Fear thou not; for I am with thee: be not dismayed; for I am thy God: I will strengthen thee; yea, I will help thee; yea, I will uphold thee with the right hand of my righteousness. (お前は恐れてはならない。私はお前と共にいるのだ。うろたえるな。私はお前の神なのである。私はお前を強めよう。然り、私はお前を助けよう。然り、私は我が正義の右手をもってお前を支えよう。)	The Lord shall strengthen us with his arm: and uphold us with his right hand. (主はその腕をもって私たちを強め、その右手をもって私たちを支えてくださろう。)
イザヤ書 41章14節	Fear not, thou worm Jacob, and ye men of Israel; I will help thee, saith the Lord, and thy redeemer, the Holy One of Israel. (恐れるな、お前、虫けらヤコブよ、イスラエルの人々よ。私がお前を助けるのだ。と、主であり汝の贖い主であるイスラエルの聖なる方は言われる。)	The Lord our God is with us; he is our Redeemer, even the holy One of Israel. (我々の神なる主は我々と共にいます。彼は我々の贖い主であり、まさにイスラエルの聖なる方である。)

2-6. マイケル・ワイズ Michael Wise (1647-87)

	<u>KJB</u>	<u>Anthem</u>
哀歌1章 4節	The ways of Zion do mourn, because none come to the solemn feasts; all her gates are desolate: her priests sigh, her virgins are afflicted, and she is in bitterness. (シオンの道々は、厳かな祭りに来る者がいないために嘆く。彼女の門はすべて荒れ果てている。彼女の祭司たちは溜息をつき、彼女の処女たちは苦しめられて、彼女は苦しみの中にある。)	The ways of Zion do mourn, because none come to her solemn feasts; all her gates are desolate: her priests sigh, her virgins are afflicted, and she is in bitterness. (シオンの道々は、厳かな祭りに来る者がいないために嘆く。彼女の門はすべて荒れ果てている。彼女の祭司たちは溜息をつき、彼女の処女たちは苦しめられて、彼女は苦しみの中にある。)

哀歌 1 章 16 節	For these things I weep; mine eye, mine eye runneth down with water, because the comforter that should relieve my soul is far from me: my children are desolate, because the enemy has prevailed. (これらのこと故に私は泣く。私の目は、私の目は、涙を流す。私の魂を救うべき慰め人が私から遠く離れているからである。私の子供たちは惨めである。敵が勝利したからである。)	For these things I weep; mine eye runneth down with water. (これらのことの故に私は泣く。私の目は涙を流す。)
哀歌 1 章 5 節	Her adversaries are the chief, her enemies prosper: for the Lord hath afflicted her for the multitude of her transgressions: her children are gone into captivity before the enemy. (彼女の仇敵どもは頭となり、彼女の敵どもは栄える。彼女の咎のおびただしさの故に、主は彼女を苦しめた。彼女の子供たちは敵の面前、連れ去られて捕囚となった。)	Her adversaries are the chief, her enemies prosper: for the Lord hath afflicted her. (彼女の仇どもは頭となり、彼女の敵どもは栄える。主は彼女を苦しめた。)
哀歌 1 章 16 節	For these things I weep; mine eye, mine eye runneth down with water, because the comforter that should relieve my soul is far from me: my children are desolate, because the enemy has prevailed. (これらのこと故に私は泣く。私の目は、私の目は、涙を流す。私の魂を救うべき慰め人が私から遠く離れているからである。私の子供たちは惨めである。敵が勝利したからである。)	For these things I weep; mine eye runneth down with water. (これらのことの故に私は泣く。私の目は涙を流す。)
哀歌 1 章 5 節	Her adversaries are the chief, her enemies prosper: for the Lord hath afflicted her for the multitude of her transgressions: her children are gone into captivity before the enemy. (彼女の仇敵どもは頭となり、彼女の敵どもは栄える。彼女の咎のおびただしさの故に、主は彼女を苦しめた。彼女の子供たちは敵の面前、連れ去られて捕囚となった。)	For the multitude of her transgressions; the Lord hath afflicted her. (彼女の咎のおびただしさの故に、主は彼女を苦しめた。)

- 哀歌 1 章
11節 All her people sigh, they seek See, O Lord, and consider: for I
bread; they have given their am become vile. (ご覧ください、
pleasant things for meal to relie ああ主よ、顧みてください。私は惨
ve the soul: see, O Lord, and めな者となり果ててしまいました。)
consider; for I am become vile.
(彼女の民はみな溜息をつき、彼ら
はパンを求める。彼らは心地よいも
のを与えて、心を和らげるために食
べ物に代えた。ご覧ください、ああ
主よ、顧みてください。私は惨めな
者となり果てました。)
- 哀歌 1 章
12節 Is it nothing to you, all ye that Is it nothing to you, all ye that
pass by? behold, and see if there pass by? behold and see, if there
be any sorrow like unto my be any sorrow like my sorrow.
sorrow, which is done unto me, (あなた方にとってこれは何でもな
wherewith the Lord hath afflicted いことなのか、通り過ぎてゆく全て
me in the day of his fierce anger. の方々よ。見よ、私に下された私の
(あなた方にとってこれは何でもな 哀しみのほど哀しみが、ほかにある
いことなのか、通り過ぎてゆく全て かどうか考えてみよ。
の方々よ。見よ、私に下された私の 哀しみのほど哀しみが、ほかにある
かどうかに考えてみよ。その哀しみも かって、主はその激しい怒りの日に
私を苦しめたのだ。)
- 哀歌 1 章
15節 The Lord hath trodden under The Lord hath trodden under
foot all my mighty men in the foot all my mighty men in the
midst of me: he hath called an midst of me: he hath called an
assembly against me to crush assembly against me, to crush
my young men; the Lord hath my young men: the Lord hath
trodden the virgin, the daughter trodden under foot the virgin,
of Judah, as in a winepress. (主は私のうちにある私の勇者たちをす うちにある私のつ強者たちをすべ
べて足元に踏みつけた。彼は私に 足もとに踏みつけた。彼は私に對
して会合を召集し、私の若者たち して会合を召集した、私の若者たち
を打ち砕いた。主はブドウ絞りの桶の 打ち砕くために。主は処女なるシ
中でのように、処女なるユダの娘を オンの娘を足元に踏みつけた。)
踏みつけた。)

哀歌 1 章 16 節	For these things I weep; mine eye, mine eye runneth down with water, because the comforter that should relieve my soul is far from me; my children are desolate, because the enemy has prevailed. (これらのこと故に私は泣く。私の目は、私の目は、涙を流す。私の魂を救うべき慰め人が私から遠く離れているからである。私の子供たちは惨めである。敵が勝利したからである。)	For these things I weep; mine eye runneth down with water: because the Comforter that should relieve my soul is far from me. (これらのことの故に私は泣く。私の魂を救うべき慰め人が私から遠く離れているからである。)
哀歌 1 章 11 節	All her people sigh, they seek bread; they have given their pleasant things for meal to relieve the soul: see, O Lord, and consider; for I am become vile. (彼女の民はみな溜息をつき、彼らはパンを求める。彼らは心地よいものを与えて、心を和らげるために食べ物に代えた。ご覧ください、ああ主よ、顧みてください。私は惨めな者となり果てました。)	See, O Lord, and consider: for I am become vile. (ご覧ください、ああ主よ、顧みてください。私は惨めな者となり果ててしまいました。)

取捨選択は時にあまりにも巧妙であるため、現代の読者には異常と思えるほどである。ギブソンがマルコ21章9節とマタイ11章10節およびルカ19章38節を並行させている（表2-3）のには、福音書によるキリストの生涯の記述の一貫性を示そうという意図があるに違いないのだが、ところがこのアンセムの歌詞は、単なる聖句の写しではなく、聖句の万華鏡といった様相を呈しているのである。第2連の第1句は実はルカ19章38節の第1句から取られたものであり、第3連の最終句はマタイ21章9節の最終句が使われている、という具合である。この聖句の再配列作業において、3福音書の原文すべてに共通する唯一の文言——その文言があったからこそ、この取捨選択が行われたと思われるのだが——は、アンセムの中では3回は登場できていない（「主の御名によって来る者に祝福あれ^{きた}」は、最初の2連にだけ現れる）。しかし、このことこそが、これほど徹底したモザイク作品の核心の一部であり、面白いところなのかもしれない。つまり、これらの聖句の内容は関わっている者の誰もが完璧にわかっているからこそ、アンセムの歌詞編者はこれらに解釈を施し、配列を組み換えたり変更を加えるたりすること

で、聖句の内容に新しく注目を向けさせているのである。ハウムズによる〈イングラランドとスコットランドの連合のアンセム〉（表2-4）の形式が奇妙である理由は、このことが説明するかもしれない。このアンセムは用いている聖句の中で最も相応しい部分である「そして彼らはもう2つの国になることはなく、再び彼らが2つの王国に分裂することは決してない」を省略してしまっているのである。この聖句はよく知られているものと想定することができる（このような想定は、オラトリオの台本作家たちも自由に行なってよいもどと感じていた〔本書10章を参照〕）。そうするとアンセム作者は、この場合で言うならば、会衆の気分を選ばれた民の状態へと高揚させることに集中できるようになるわけである。

「コラージュ」アンセムの手法は、聖句を用いたオラトリオを先取りするものであって、旧約と新約の聖句を入れ替え差し替え用いるという《メサイア》の手法の先例にさえなっている（例えば表2-5を参照）。ヘンデルの時代において最高のコラージュのアンセムは、もちろんヘンデル自身による《キャロライン王妃の葬送アンセム》である。シャンドスおよび戴冠式の諸アンセムにおいて、いかにもヘンデルらしいことに、上に掲げた様々な種類の歌詞のほとんどを実験的に用いている（その上、シャンドス・アンセムの第2番においては、2種類の翻訳を使っている）。例えばシャンドス・アンセム第10番は、詩篇27の1、3、4、7節と、詩篇18の31節、7節（から最後の4語を除いたもの）と14+13節、詩篇20の8節（から最後の3語を除いたもの）、詩篇34の3節、詩篇28の8節、詩篇29の4+9節、詩篇30の4節、詩篇45の18節という構成になっている（+は圧縮を示す）。《キャロライン王妃の葬送アンセム》の歌詞を編纂したのは、ウェストミンスター寺院の次席司祭エドワード・ウィルズであった（表3を参照）。

この歌詞をジェネズが自分のオラトリオに採用した際——彼が《エジプトのイスラエル人》の台本作家であったとしての話であるが——喜々としてそうしたであろうことは、想像に難くない。と言うのはこの歌詞にも、ジェネズがのちに《メサイア》に導入した、聖句の取捨選択、比較、編集という醍醐味がある。新旧約両聖書と祈祷書とに典拠している点も《メサイア》と同じである（しかも、それ以上に幅を広げて聖書外典まで使っている）。ひょっとすると、ジェネズはその大胆さを危ぶんでさえいたかもしれない。これ以上のことをすれば、聖書の完全無欠性への敬意が損なわれかねないからである。個々の単語、時制や人称

が変えられている。それぞれの節はもともとの文脈から挽ぎ取られるかのように引用されている（もとの文脈において一続きになっている聖句が3節連続して用いられている箇所はない）。断片しか用いられていない節も多いのである。語句の繰り返しは特に複雑な方法で行われる。「繰り返し」が、サムエル記下において「ああ、強者たちは倒れてしまった！」が3度繰り返されている例に倣いつつ、この句を哀歌からの1節の半分と結合し、その意味を変質させているのである（つまり、もともとエルサレムの都を指していたものを、亡くなった王妃を意味するようにしている。また、同じ伝により、フィリピの信徒への手紙からの引用聖句に変更を加えることで、その聖句が推賞するところを亡き王妃は成し遂げたと主張する）。オラトリオ台本における多くの部分がそうであるように、この葬送アンセムの歌詞も、聖書に通曉した者の持つ自由裁量が駆使されて、聖書の持つ豊饒性と万能性を讀めるものとなっている。

表3 《キャロライン王妃の葬送アンセム》と典拠資料の比較

<i>Funeral Anthem for Queen Caroline</i>		
	<u>KJB/BCP</u>	<u>Anthem</u>
哀歌1章 4節	The ways of Zion do mourn, because none come to the solemn feast: all her gates are desolate: her priests sign, her virgins are afflicted, and she is in bitterness. (シオンの道々は、厳かな祭りに来る者がいないために嘆く。彼女の門はすべて荒れ果てている。彼女の祭司たちは溜息をつき、彼女の処女たちは苦しめられて、彼女は苦しみの中にある。)	The ways of Zion do mourn, and she is in bitterness; (シオンの道々は嘆き、彼女は苦しみの中にある)
哀歌1章 11節	All her people sigh, they seek bread; they have given their pleasant things for meat to relieve the soul: see, O Lord, and consider; for I am become vile. (彼女の民はみな溜息をつき、彼らはパンを求める。彼らは心地よいものを与えて、心を和らげるために食べ物に代えた。ご覧ください、ああ主よ、顧みてください。私は惨めな者となり果てました。)	all her people sigh, (彼女の民はみな溜息をつき、)

哀歌2章 10節	The elders of the daughter of Zion sit upon the ground, and keep silence: they have cast up dust upon their heads; they have girded themselves with sackcloth: the virgins of Jerusalem hang down their heads to the ground. (娘シオンの長老たちは地に坐して黙する。彼らは頭に塵をかぶった。彼らは荒布で身を固めた。エルサレムの処女たちは地に頭を垂れる。)	and hang down their heads to the ground. (そして地に頭を垂れる。)
サムエル記 下1章19節	The beauty of Israel is slain upon the high places: how are the mighty fallen! (イスラエルの美は高地において殺された。ああ、強者たちは倒れてしまった!)	How are the mighty fall'n!— (ああ、強者たちは倒れてしまった! ——)
サムエル記 下1章25節	How are the mighty fallen in the midst of the battle! O Jonathan, thou was slain in thine high places. (ああ、戦いのさなかに、強者たちは倒れてしまった! 嗚呼、ヨナタンよ、あなたは自分の高地で殺された。)	——
サムエル記 下1章27節	How are the mighty fallen, and the weapons of war perished! (ああ、強者たちは倒れてしまい、戦いの武器は消えさせた!)	——
哀歌1章 1節	How doth the city sit solitary, that was full of people! How is she become as a widow! she that was great among the nations, and princess among the provinces, how is she become tributary! (ああ、かつては人々で溢れていたこの都が寂しく坐している! ああ、彼女は寡婦のようになってしまった! かつては諸国民のあいだで大いなる者であり、諸地域のうちの姫であった彼女が。ああ、彼女は献上奴隷になってしまった!)	she that was great among the nations, and princess of the provinces! (かつては諸国のあいだで大いなる者であり、諸地域のうちの姫であった彼女が!)
サムエル記 下1章19節	The beauty of Israel is slain upon the high places: how are the mighty fallen! (イスラエルの美は高地において殺された。ああ、強者たちは倒れてしまった!)	How are the mighty fall'n!— (ああ、強者たちは倒れてしまった! ——)

サムエル記 下1章25節	How are the mighty fallen in the midst of the battle! O Jonathan, thou was slain in thine high places. (ああ、戦いのさなかに、強者たちは倒れてしまった！ 嗚呼、ヨナタンよ、あなたは自分の高地で殺された。)	——
サムエル記 下1章27節	How are the mighty fallen, and the weapons of war perished! (ああ、強者たちは倒れてしまい、戦いの武器は消え失せた！)	——
ヨブ記29章 14節	I put on righteousness, and it clothed me: my judgment was as a robe and a diadem. (私は義を着し、それは私を覆った。私の公義は上着や冠のようであった。)	She put on righteousness, and it clothed her; her judgment was a robe and a diadem. (彼女は義を着し、それは彼女を覆った。彼女の公義は上着や冠のようであった。)
ヨブ記29章 11節	When the ear heard me, then it blessed me, and when the eye saw me, it gave witness to me; (耳が私のことを聞くと、それは私を祝福した。目が私を見ると、それは私を証した。)	When the ear heard her, then it blessed her, and when the eye saw her, it gave witness of her. (耳が彼女のことを聞くと、それは彼女を祝福した。目が彼女を見ると、それは彼女について証した。)
サムエル記 下1章19節	The beauty of Israel is slain up on the high places: how are the mighty fallen! (イスラエルの美は高地において殺された。ああ、強者たちは倒れてしまった！)	How are the mighty fall'n!— (ああ、強者たちは倒れてしまった！)
サムエル記 下1章25節	How are the mighty fallen in the midst of the battle! O Jonathan, thou wast slain in thine high places. (ああ、戦いのさなかに、強者たちは倒れてしまった！ 嗚呼、ヨナタンよ、あなたは自分の高地で殺された。)	——
サムエル記 下1章27節	How are the mighty fallen, and the weapons of war perished! (ああ、強者たちは倒れてしまい、戦いの武器は消え失せた！)	——

- 哀歌1章
1節 How doth the city sit solitary, she that was great among the
that was full of people! How is nations, and princess of the
she become as a widow! she that provinces! (かつては諸国民のあい
was great among the nations, だで大いなる者であり、諸地域のう
and princess among the provinces, ちの姫であった彼女が!)
- how is she become tributary!
(ああ、かつては人々で溢れていた
この都が寂しく坐している! ああ、
彼女は寡婦のようになってしまった!
かつては諸国民のあいだで大いなる
者であり、諸地域のうちの姫であつ
た彼女が。ああ、彼女は献上奴隷に
なってしまった!)
- ヨブ記29章
12節 Because I delivered the poor She deliver'd the poor that cried,
that cried, and the fatherless, the fatherless, and him that had
and him that had none to help none to help him. (彼女は叫び声
him. (なぜならば私が、叫び声を上 を上げる貧者たち、父親のいない者
げる貧者たち、父親のいない者たち、 たち、助け手を持たぬ者を救った。)
- 誰も助け手のいない者を救ったから
である。)
- シラ書36章
23節 [訳者 Kindness, meekness and comfort
註: 新共同 were in her tongue; (彼女の舌に
訳では28節] men. (彼女の舌に優しさと穏やか
さと慰めがあるなら、彼女の夫はほ
かの男たちとは比べものにならない。)
- フィリピの
信徒への手 Finally, brethren, whatsoever things
紙4章8節 are true, whatsoever things are
just, whatsoever things are pure,
whatsoever things are lovely,
whatsoever things are of good
report; if there be any virtue,
and if there be any praise, think
on these things. (終わりに、兄弟
たちよ、すべて真実なこと、すべて
正しいこと、すべて純潔なこと、す
べて愛すべきこと、すべて誉れ高き
こと、また美德や、賞讃に価するこ
とがあるならば、それらのことに心
を留めなさい。)
- サムエル記
下1章19節 The beauty of Israel is slain up How are the mighty fall'n!—
on the high places: how are the (ああ、強者たちは倒れてしまった!)
- mighty fallen! (イスラエルの美は
高地において殺された。ああ、強者
たちは倒れてしまった!)

サムエル記 下1章25節	How are the mighty fallen in the midst of the battle! O Jonathan, thou wast slain in thine high places. (ああ、戦いのさなかに、強者たちは倒れてしまった！ 嗚呼、ヨナタンよ、あなたは自分の高地で殺された。)	——
サムエル記 下1章27節	How are the mighty fallen, and the weapons of war perished! (ああ、強者たちは倒れてしまい、戦いの武器は消えさせた！)	——
哀歌1章 1節	How doth the city sit solitary, that was full of people! How is she become as a widow! she that was great among the nations, and princess among the provinces, how is she become tributary! (ああ、かつては人々で溢れていたこの都が寂しく坐している！ ああ、彼女は寡婦のようになってしまった！ かつては諸国民のあいだで大いなる者であり、諸地域のうちの姫であった彼女が。ああ、彼女は献上奴隷になってしまった！)	she that was great among the nations, and princess of the provinces! (かつては諸国民のあいだで大いなる者であり、諸地域のうちの姫であった彼女が。)
詩篇112篇 6節	For he shall never be moved: and the righteous shall be had in everlasting remembrance. (彼は決して動かされることはなく、 ^{ただ} 義しい者は永遠に記憶されるだろう。)	The righteous shall be had in everlasting remembrance, (義しい者は永遠に記憶され、)
ダニエル書 12章3節	And they that be wise shall shine as the brightness of the firmament; and they that turn many to righteousness as the stars for ever and ever. (そして賢い者は大空の輝きのように光を放つであろう。そして多くの人々を義に振り向かせる者は、常しえに星々のように。)	and the wise will shine as the brightness of the firmament. (そして賢い者は大空の輝きのように光を放つであろう。)
シラ書44章 14節	Their bodies are buried in peace; but their name liveth for evermore. (彼らの亡骸は平安のうちに埋められているが、彼らの名前は永遠に生き続ける。)	Their bodies are buried in peace; but their name liveth for evermore. (彼らの亡骸は平安のうちに埋められているが、彼らの名前は永遠に生き続ける。)

シラ書44章 15節	The people will tell of their wisdom, and the congregation will shew forth their praise. (民は彼らの知恵を語り、会衆は彼らへの賞讃の念を示すであろう。)	The people will tell of their wisdom, and the congregation will shew forth their praise; (民は彼らの知恵を語り、会衆は彼らへの賞讃の念を示すであろう。)
知恵の書 5章15節	But the righteous live for ever more; their reward also is with the Lord, and the care of them is with the most high. (しかし正しき者たちは永遠に生きる。彼らのへ報いは主と共にあり、彼らへの配慮は最と高き方と共にある。)	their reward also is with the Lord, and the care of them is with the most high. (彼らのへ報いは主と共にあり、彼らへの配慮は最と高き方と共にある。)
知恵の書 5章16節	Therefore shall they receive a glorious kingdom, and a beautiful crown from the Lord's hand; for with his right hand shall he cover them, and with his arm shall he protect them. (それゆえに、彼らは栄光に満ちた王国を授かり、主の御手から美しい冠を受けるであろう。彼の右手をもって彼は彼らを覆い、御腕をもって彼は彼らを守るであろう。)	They shall receive a glorious kingdom and a beautiful crown from the Lord's hand. (それゆえに、彼らは栄光に満ちた王国を授かり、主の御手から美しい冠を受けるであろう。)
詩編103篇 17節	But the merciful goodness of the Lord endureth for ever and ever upon them that fear him, and his righteousness upon children's children. (しかし、主の慈しみは彼を畏れる者たちの上に常しえにあり、彼の義は子らの子らの上に。)	The merciful goodness of the Lord endureth for ever on them that fear him, and his righteousness on children's children. (しかし、主の慈しみは彼を畏れる者たちの上に永遠にあり、彼の義は子らの子らの上に。)

(以下、次回へ続く)

注

- (1) Aaron Hill, *The Tears of the Muses: A Poem* (1737), repr. Works (2/1754), IV, 163-88, at. pp. 175-6.
- (2) これは以下のヒルの雑誌においても主張されている点である。 *The Plain Dealer* (2/1734), II, 309-16 (no. 94, 12 February 1724/5).
- (3) Alexander Malcolm, *A Treatise of Musick* (Edinburgh, 1721, London, 1730), pp.

- 1, 480, 598; Hildebrand Jacob, 'Of the Sister Arts', *Works* (1735), pp. 383, 385; Charles Avison, *An Essay on Musical Expression* (1752), pp. 5-6.
- (4) *An Essay on the Opera's after the Italian Manner* (1706) in *The Critical Works of John Dennis*, ed. Edward Niles Hooker (Baltimore, 1939), I, 385, 389. 同著者による以下も参照。 *The Stage Defended*, in *Works*, II, 301.
- (5) Winton Dean and J. Merrill Knap, *Handel's Operas 1704-1726* (1987), p. 147. 以下も参照。 Herbert M. Schueller, 'The Use and Decorum of Music as Described in British Literature, 1700 to 1780', *Journal of the History of Ideas* 13 (1952), 73-93. Schueller 論文では次のように述べられている。「世俗音楽の効能と利用法をめぐる18世紀の理論には、常に3つの要素が見られた……。まず、芸術は人間を教導し向上させることができるし、また実際にそうしなければならない、という考え方があった」(p. 84)。
- (6) 例えば以下を参照。 John Playford, preface to *A Brief Introduction to the Skill of Musick*. この本は1724年には18版にまで達しており、1726年の時点において、権威書として以下で引用されている。 Thomas Bisse, *Musick the Delight of the Sons of Men. A Sermon Preached at the Cathedral Church of Hereford, at the Anniversary Meeting . . . September 7. 1726* (1726). また、以下も参照。 John Blow, preface to *Amphion Anglicus* (1700); *Common Sense*, 14 October 1738. あるいは、注(3)に挙げた文献も参照されたい。
- (7) 以下を参照。 Ruth Smith, 'The Argument and Contexts of Dryden's Alexander's Feast', *Studies in English Literature* 18 (1978), 465-90; *The Plain Dealer*, II, 1724/5.
- (8) 以下を参照。 Thomas R. Preston 'Biblical Criticism, Literature, and the Eighteenth-Century Reader', in *Books and their Readers in Eighteenth-Century England*, ed. I. Rivers (Leicester, 1982), pp. 97-126.
- (9) 本書参考文献の「説教および関連小冊子」の項を参照。
- (10) 以下において、Percy Scholesはあらゆる手を尽くし、ピューリタンたちが音楽を敵視していたという嫌疑を晴らそうとしているのだが、彼らが教会のオルガンを破壊し取り去ったことだけは、やむをえず伝えている。 Scholes, *The Puritans and Music* (1954), pp. 231-45. 以下の目撃証言の記述も参照。 John Evelyn, *Diary*, ed. E. S. de Beer (Oxford, 1955), II, 109, 262, 265.
- (11) Jeremy Collier, 'Of Musick', *Essays upon Several Moral Subjects* (2/1697), II, 19,

- 25.
- (12) Thomas Secker, Charge II, in *Works*, V, 343-4, quoted Norman Sykes, *Church and State in England in the XVIIIth Century* (Cambridge, 1934), p. 16.
- (13) William Croft, *Musica Sacra: or, Select Anthems in Score* (1724, 1730), preface, p. 4.
- (14) George Lavington, *The Influence of Church-Music. A Sermon Preached in the Cathedral Church of Worcester, at the Anniversary Meeting . . . September 8. 1725* (1725, 3/1753), p. 18.
- (15) William Dingley, *Cathedral Service Decent and Useful. A Sermon Preach'd before the University of Oxford at St Mary's on Cecilia's Day*, 1713 (Oxford, 1713), p. 14.
- (16) Jeremy Collier, *A Short View of the Immorality and Profaneness of the English Stage* (1698), 5th corr. edn (1730), p. 279.
- (17) これ以前の出版取締法は1695年に廃止されていた。1737年の取締法に関して、詳しくは以下を参照されたい。John Loftis, *The Politics of Drama in Augustan England* (Oxford, 1963), pp. 128-30; L. W. Conolly, *The Censorship of English Drama 1737-1824* (San Marino, CA, 1976).
- (18) Royal injunction of 1559, quoted Nicholas Temperley, *The Music of the English Parish Church* (Cambridge, 1979), I, 39.
- (19) Charles Hickman, *A Sermon Preached at St Bride's Church on St Cecilia's Day November 22th 1695* (1696), pp. 14-16. オルガンが教会堂に相応しいかどうかをめぐって続けられた議論については、例えば以下を参照。Christopher Dearnley, *English Church Music 1650-1750* (1970), pp. 168-75. また、ヘンデルの《アレグザンダーの饗宴》との関連については上記の拙論 'Argument and Contexts' を参照。
- (20) 本書第7章のほか、以下を参照。A. H. Shapiro, "'Drama of an Infinitely Superior Nature': Handel's Early English Oratorios and the Religious Sublime", *M & L* 74 (1993), 215-45, at pp. 224-7; Deutsch pp. 139-43, 159, 279, 306-7, 322, 476, 481-3, 577, 609, 657-8, 678, 695, 758, 761, 773, 822, 823, 832.
- (21) James Brook, *The Duty and Advantage of Singing to the Lord. A Sermon Preach'd in the Cathedral Church of Worcester, at the Anniversary Meeting. . . Sept. 4. 1728* (n.d.), p. 16. 以下も参照。Richard Banner, *The Use and Antiquity of*

- Musick in the Service of God. A Sermon Preach'd in the Cahedral-Church at Worcester, September 14 1737 at the Anniversary Meeting* (Oxford, 1737), pp. 13-14.
- (22) Thomas Macro, *The Melody of the Heart. A Sermon Preach'd at the Opening of an Organ in St Nicholas's Church, in Great Yarmouth, December the 20th 1733* (1734), pp. 24, 31.
- (23) Arthur Bedford, *The Great Abuse of Musick* (1711), pp. 209-11. 同書 p. 182-4も参照。また、以下と比較されたい。Collier, *Essays*, II, 25; Macro, *Melody of the Heart*, p. 31. 当時の教会音楽に対する他の同様の評価については、特に以下を参照。Evelyn, *Diary*, III, 347; Roger North on Music, ed. J. Wilson (1959), pp. 125, 167-70. イタリア風の「浮薄」で劇場的なオルガンの即興曲に対する不満は、以下においても言及されている。Temperley, *Music of the English Parish Church*, I, 102-3, 136-7; Dearnley, *English Church Music*, p. 127.
- (24) Alexander Pope, *An Essay on Criticism*, II, 342-3, *Pastoral Poetry and An Essay on Criticism*, ed. E. Audra and Aubrey Williams, *The Poems of Alexander Pope*, I (1961), p. 277. 同様のものとして、Popeによる以下も参照。 *Epistle to Burlington*, II, 141-4.
- (25) Charles Avison, *Essay* (1752), pp. 74-5. この見解は以下において支持を得ている。[William Hayes,] *Remarks on Mr. Avison's Essay on Musical Expression* (1753), pp. 75-6.
- (26) Dean, *Oratorios* p. 109.
- (27) Daniel Prat, *An Ode to Mr Handel, on His Playing on the Organ*. 以下に全文が掲載されている。Deutsch pp. 139-43. ヘンデルのオルガン演奏に関するその他の同時代人の論評については、以下を参照。Deutsch pp. 323, 351, 383-4, 388, 390, 440, 485, 501, 708, 709, 734, 754, 758, 822.
- (28) Thomas Bisse, *A Rationale on Cathedral Worship or Choir-Service: A Sermon Preach'd in the Cathedral Church at Hereford, at the Anniversary Meeting . . . Sept. 7. 1720* (1720). 以下も参照。Smith, 'Argument and Contexts'; Shapiro, 'Drama', pp. 227-32.
- (29) Thomas Payne, *A Defence of Church Musick. A Sermon Preached in the Cathedral-Church of Hereford at the Meeting of the Three Choirs, September 6, 1738* (Oxford, 1738), pp. 7-8, 16-20.

- (30) Shapiro, 'Drama', pp. 227-32, citing James Peirce, *A Vindication of the Dissenters* (1717), III, 100; Bisse, *Rationale*.
- (31) 礼拝に対する宣誓拒否者たちの見解については以下を参照。J. H. Overton, *The Nonjurors* (1902); Henry Broxap, *The Later Non-jurors* (Cambridge, 1924); Gordon Rupp, *Religion in England 1688-1791* (Oxford, 1986), pp. 17-21; Richard Sharp, 'New Perspectives in the High Church Tradition: Historical Background 1730-1780', in *Tradition Renewed: The Oxford Movement Conference Papers* ed. Geoffrey Rowell (1986), pp. 4-23.
- (32) Charles Leslie, *A Short and Easy Method with the Jews* (8/1737).
- (33) Bedford, *Temple Musick*, pp. 29-34, 64-5, 93-210, 221, 229-36. ラウスに先駆けている点に関しては、さらに本書第4章を参照。
- (34) ベッドフォードおよびその『音楽の大誤用』については、以下で論じられている。William Weber, *The Rise of Musical Classics in Eighteenth-Century England* (Oxford, 1992), pp. 47-56. 宗教改革期の教会が詩篇の詠唱を奨励したことについては、以下を参照。Patrick Collinson, *The Birthpangs of Protestant England: Religious and Cultural Change in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (1988, repr. 1991), p. 96.
- (35) Shapiro, 'Drama', p. 230.
- (36) Blow, *Amphion Anglicus*, preface.
- (37) Bedford, *Temple Musick*, p. 52, 54, 61, 61, 91-2, 220.
- (38) 特に以下を参照。Jens Peter Larsen, *Handel's Messiah: Origins, Composition, Sources* (1957), pp. 25-9, 48-94.
- (39) 劇的オラトリオにおけるアンセムに関しては、以下を参照。Dean, *Oratorios*, App. E, pp. 641-8. William Herrmannは自編の葬送式アンセムSchirmer版 (New York, 1976) において、『サウル』の自筆楽譜で却下された頁には、筆耕に向けて、〈シンフォニー〉および第1、2、3、5、8曲を〈挽歌〉と複数の新しいレチタティーヴォのために利用する旨の指示があった、と指摘している (p. ix)。
- (40) 例えば、1756年の《アタリア》の再演におけるシャンドス・アンセム第5曲と1曲の戴冠式アンセムがそうである。以下を参照。Dean, *Oratorios*, p. 262.
- (41) Deutsch p. 573, from *Autobiography and Correspondence of Mary Granville, Mrs Delany* (1861-2), II, 222.
- (42) アンセムの音楽面に関しては、以下を参照。Nicholas Temperley, 'Music in Church', in

- The Blackwell History of Music in Britain: The Eighteenth Century*, ed. H. Diack Johnstone and Roger Fiske (Oxford, 1990), pp. 357-96, at pp. 358-74. ヘンデルの教会音楽についての解説には以下がある。Basil Lam, 'The Church Music', in *Handel: A Symposium*, ed. Gerald Abraham (1954), pp. 156-78.
- (43) それぞれ以下の王室礼拝堂次席司祭によって編集されている（それぞれの分量を括弧内にページ数によって示す）。1724年版 Edward Aspinall (136頁)、1736年版 George Carleton (182頁)、1749年版 Anselm Bayley (214頁)。
- (44) アンセムの歌詞集についての研究はほとんどなされていない。しかしながら、以下を参照。Graydon Beeks 'The *Chandos Anthems* of Haym, Handel and Pepusch', *GHB* 5 (1993), 161-93, esp. p. 175. 宗教改革以前のアンセムの歌詞は以下において分析されている。John Morehen, 'The English Anthem Text, 1549-1660' *Journal of the Royal Musical Association* 117 (1992), 62-85. Alfred Mannが以下においてLarsenの見解に従い、ヘンデルのアンセムとオラトリオとを関連づけて歌詞選択の類似性を指摘しているのは正しい。Mann, 'Messiah: The Verbal Text', in *Festskrift Jens Peter Larsen*, ed. Nils Schiørring, Henrik Glahn and Carsten E. Hatting (Copenhagen, 1972), pp. 181-8. しかし、以下においてHoward Coxと共に、ヘンデルのアンセムの歌詞の構造原理は新奇なものであったと示唆しているのは、間違いである。Mann and Cox, 'The Text Selection Process in Handel's *Chandos Anthems*', *Bach* 24/2 (Spring-Summer 1993), 21-34.
- (45) 出典はHerrmann (Schirmer版, pp. v-vi) によって、以下であることが同定されている。*The Gentleman's Magazine* 7 (1737), 763-4; *The Old Whig*, 22 December 1737.

訳注

- [1] この箇所、原著ではどういうわけか「1734年、ティヴァートンの教会堂」となっているが、注（22）の記載のほうが正しい。
- [2] 原著は誤ってfull anthemとしているが、正しくは訳文のようにverse anthemである。
- [3] 原著はこの引用句の出典を示すのを忘れているが、以下の第49項に見られる言葉である。*Iniunctions geven by the Quenes Maiestie, Imprinted at London: In Powles Chuchyarde by Rychard Iugge and Iohn Cawood, printers to the Quenes Maiestie* [1559].

訳者付記

以上はRuth Smith, *Handel's Oratorios and Eighteenth-Century Thought* (Cambridge University Press, 1995) 第1部 'English origins of English oratorio' の第3章 'Music, morals and religion' (pp. 81-108) とその尾注の部分 (pp. 378-82) を試訳したものである。

毎回、小さな誤植などは特に断ることなく改めているが、今回は内容的に重要な点に関する誤記や記載漏れが若干あったので、訳注によって明示しておいた。

例によって、原文について不明な点は質問メールで著者を煩わせて訳文の向上に努めたつもりだが、なお思わぬ不備はあるかもしれない。忌憚のないご指摘・ご指導を切にお願い申し上げます。